

史談会秋の研修旅行

奥豊後を訪ねて

三重・緒方・竹田・久住

後 藤 知 久

(会員・佐伯市中山区)



私にとっては、二回目の史談会秋の研修旅行である。正直の処、私はあまり団体旅行という形のもの好きではない。それが、編集という仕事をやらせていただいているのだからと、一昨年の安心院旅行に参加した。ところが、思いがけない楽しい旅になって、昨年は一も二もなく参加した。

いつもと変わっていたのは、男性の参加者が女性のそれを上回っていたことである。

定刻少し過ぎ、これもいつもと違う好天の下、男性十一名、女性九名を乗せたバスは、軸丸さんの案内で、奥豊後の旅へ出発した。

一 仏の里三重

バスは一〇号線に別れを告げ、犬飼町から三二六号線へ入る。まず、最初の見学地は、三重町市辺田八幡社である。ここには、鎌倉時代の作とされる大分県文化財指定の、木造の阿弥陀如来像がある。

社殿横の古びた堂に安置されているが、鍵が掛けられている。社務所の奥さんのご好意で開けていただき、高さ三メートル近い座像を拝観する。思いがけない所で見がけないものに出会ったような驚きがあった。

二 柿の実に映える米どころ緒方

三重町をあとに緒方町に入る。

緒方は「緒方五千石」といわれる米どころである。緒方三郎惟栄の故地である。前もって軸丸さんが連絡してあるとのこと、まだ建て間もない新しい資料館に高野さんを訪問する。

高野さんの先祖は宇目町の出身だそうで、現在は、前任者の館長が大学へ復学したとかで、ここに勤務する、まだ学生気分の残る好青年である。

なんでも町内の大行事八幡社に保存されている文化財

を拝観させてもらうとのことだが、それを管理している部落の世話役が、昼にならないと畑から帰らないので、それまで館内を見学することにする。

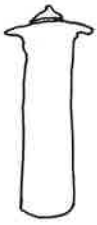
まだ勤務して日が浅いせいか、高野さんの説明にもたどたどしいものがあったが、かえってそれが新鮮な感じを与えてくれた。館内はこじんまりとまとめられていてとすると、こうしたものはほこりをかぶったような状態になりがちなものだが、ここは訪れる人が多いのか、そんな様子は見られなかった。

「少しお昼は下がりますが辛抱してください」

と軸丸さんに言われ、高野さんの先導で大行事八幡社に向う。

大行事八幡社は竹やぶに囲まれた古びた社である。近くに住む世話役の方が見えて、倉庫から幾つかの文化財を持出してくる。

大治元年（一一二四）に製作された銅経筒附天蓋（県



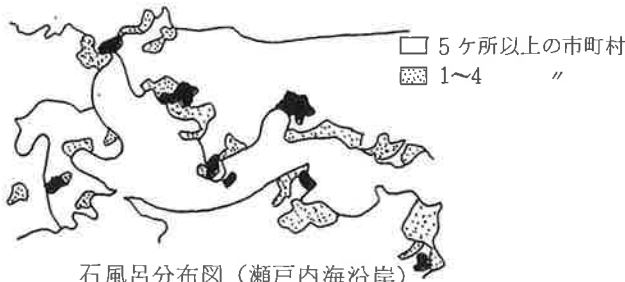
銅経筒付天蓋

文化財指定）・神面・狗犬三

その他を拝観させていただく。

木彫りの小さなものだが、とてもかわいらしい。

聞けば、盗難を恐れて、地元の人でもめったに拝観できないらしい。改めて、前もって話をしておいでくれた軸丸さんに感謝する。



石風呂分布図（瀬戸内海沿岸）

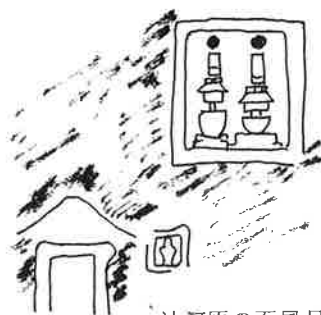
正直の処、私は「緒方」と聞いても、いつも五七号線ばかり通っているので、全然町に対する知識はなかった。それだけに次から次へと見て歩いて「成程これは」と、感心したり、見直したりした。

大行事八幡社をあとにして、緒方宮迫東・同西の磨崖仏を見学した。いずれも平安時代の作と見られ、東の方は、右に不動明王、左に多聞天と仁王を配した大日如来の座像。西の方は、右から弥陀・釈迦・薬師三如来の平等平行。どちらも丘の中腹の浅い窟内にある。

続いて今度は、尾崎の石風呂

を見学に行く。石風呂といえ、一昨年山香町でも見たが、説明によると、石風呂は瀬戸内海沿岸に分布していて、こうした山の中にあるのは珍しいということだった。その石風呂が緒方には十箇所もあり、その中でも尾崎の石風呂は、国の重要文化財に指定されているそうである。すぐ前を川が流れ、切り立った岩壁に造られていて、今でも十分使用できる状態にあった。石風呂は現代流に言えば、サウナといったところだろうか。

そして、最後に瑞光庵の蓬来様を見学した。資料によれば、蓬来様というのは、中国古代渤海湾の沿岸地帯に



発生した神仙思想で、風神聖な靈物とされている亀だそうである。瑞光庵の屋根にあたる部分分が亀の甲型をしている。

一体、どうしてそういうものがここににあるのか、なんとも不思議な思いがした。

高野さんに厚くお礼

を言って、私達は原尻の滝へ急いだ。観光というより近くの食堂で昼食を取るためだった。熊本県から来たらしい視察団のバスが停車していて、食堂は町会議員らしい人達でいっぱいだった。

出来たばかりの熱い団子汁は、すき腹にこたえられない程美味しかった。第一、店の人がとても親切で、それだけでも満ち足りた気持ちになった。

こうして、何度か緒方町の中を行き来したが、その都度、目に入ったのが柿の実。葉が少なく、鈴なりの柿の実が、秋の青空に映えて美しかった。他の町でも柿の木は見したが、みんな葉が多くて、このような明るさがなく、逆に暗い感じを与えていたのを思い出す。それにしてもあれだけ多量の柿の実は、一体どのように処分されるのだろうか、そんなことまで考えた。

予定では、このあと竹田市の見学をするはずであったが、緒方町で思わぬ時間を取ったので、見学は明日に回し、中川氏歴代の墓地のある碧雲寺を見ることにする。墓地は、寺の右の奥の方にある。佐伯の毛利家の墓地とは趣きを異にしている。ひとりひとりの亡くなられた

年月を見て歩いたら、いずれも若死にしていることに気がつく。それにしても随分若い歳である。

墓地はきれいに整備されていて、道路から近いのでたやすく見学できる。軸丸さんとはご懇意のようで、お茶とお菓子の接待を受けて暇をする。

四時過ぎ、国道五七号線から四四二号線に入り、一路今夜の宿である七里田温泉へ車を走らせる。

三 高原の町

湯煙りの宿久住

草深野ここに仰げば

国の秀や

久住は高し

雲を生みつつ

北原 白秋

久住山

阿蘇のさかいをする谷の外はひださえ無き裾野かな

与謝野 晶子

久住には、毎年二、三回は来る。山の好きな私は、勤めていたころは、冬山・みやまきりしまの花のころ、と



七里田温泉から大船を望む

毎年欠がさずに登山を楽しんでいた。だが、七里田温泉は初めてである。右に折れ、左に折れて行きついたのは大船山のふもと。いつも久住山を正面に見ていた風景とはちょっと違う。体力がないので、大船山には登ったことはないが、ここから見る山は、なんとなく登れそうな気がした。（よし。来年は）という気持がすぐ頭をもたげた。

急な坂を下って部落に入り、一軒の古びた建物の前に停る。どうやらここが今夜の宿になる大船荘らしい。見るからに古びた建物で、ちょっとがっかりする。

部屋割りが終わって通された部屋には、中央にこたつがぼつんとあるだけ。

「もう少し高くていいからもっとましな所を」

と思っただけである。それでも半ばあきらめた形でこたつに入っていると、食事の仕度が出来たからと連絡があった。（この調子ならろくなものは出まい）と、一階の広間の食堂に入ってまたびっくり。

長く並べられたテーブルには、山海の（いや、山の）珍味がずらりと並んでいる。山のように盛られた牛肉あり、珍しい山菜の手料理あり、籠にはうすく平べったい

手製のゆでもち、もぎたての柿の実が所狭しと。その上焼酎のサーブスまでついている。現金なものでさっきまでの不満もどこへやら。みんなにこにこしている。

どれも美味しい。仕出しでない心のこもった手作りの味が、舌を楽しませてくれる。一村一品料理だという、およそ場違いのような、大きく立派なお椀に盛られた汁もすばらしかった。

思わず量を過した私は、

「少しゆるいけれど、長く入ってれば温まりますよ」という宿の温泉に入る。外へ行けば、質の違うお湯があると聞いたが、もう、夜は寒い程冷たいので、内湯で済ませる。

朝の食事がまたすばらしかった。もぎたてのトマト、自家製らしい山菜の数々の料理、卵もざるに盛って、風情がある。私達は感謝の気持ちがいっぱい、何度も何度もお礼を言いながら宿を出た。

食事の前に、近くにあるという古墳を見に行ったり、眼前に横たわる大船山の少し色づき始めた山容に見入ったりしたが、このあたり、史跡の多い所らしい。この七里田から登る大船山の中腹には、岡藩主中川侯入山の墓



久住高原

地や白丹南山城主志賀氏の遊樂地である納地公園もあるそうである。今日の予定は、久住の史跡をたどってみようということであったが、大船山の眺めのあまりのすばらしさに、バスで行ける所までと山に向う。

中腹から眺めると、黒沢明監督の「乱」の舞台になった高原が、眼下に一望に横たわる。最高の気分である。

「大船にも登りたいんだが、私の体力ではねえ」

と、これまで久住には毎年のように登ったけれど、未だに登ったことがないだけに、私は十分満足し、ひそかに来年を期した。

結局、久住では、役場の近くの久住神社を見学するだけにとどめ、最終目的地である竹田へ向けて出発する。

しかし、久住でも軸丸さんの手配で資料を沢山戴いた。

四 ああ荒城の月いまいずこ

もう四、五年前になるだろうか。私はしばらく別府の文学学校に席を置いていたことがある。その時、みんなで竹田の歴史資料館の見学をした。今でも覚えているのは、そのとき何となく体調が優れず、あまり気のりしない見学だったが、帰ってすぐに入院する羽目になったことである。だから、今度はそれ以来の竹田訪問ということになる。

狭い町中を通して、まず、歴史資料館へ行く。玄関入口近くに展示されている岡城の模型を見る。そのあまりの規模の大きさに驚く。こんなすばらしい城だったのかと、改めてその全容を見たい思いにかられる。

階上には田能村竹田の書が展示されているが、恥しいことだが、私は軸物はあまり好きな方ではない。

その竹田の住居跡へ行く。

竹田は岡藩の典医の次男に生まれ、二十二才の時、江戸に出て画を修め、わが国の南面の最高峰に達した人である。建物の中を見せてもらったが、なんとなく気持ちの落ち着くふんいきで、こんな所で生活してみたいなあと思う。ただ台所だけは（さぞ大変だったろうなあ）と思う作りで、昔の家というもののあり方がわかったような

気がした。

ここで思いがけない発見をした。それは、庭に散っている柿の落ち葉の美しさである。それは、絵の具では到底出せそうもない見事な色だった。自然の作り出す色や紋様に、私は別の意味の柿の命を垣間見た思いがした。あまりの見事さにそのまましておくのが惜しく、いけ花の素材として生かしてみたくなり、拾い集めて帰ったが、大切にした割に色がさめ、思う程の効果は挙げ得なかった。やはり、自然のものは自然の中でこそ映えるのだろう。

竹田荘を出ると、武家屋敷通りを通過して、キリシタンの洞窟礼拝堂へ行く。家々の奥まった山の岩壁に掘られた礼拝堂は、まだしっかりしていて、いまにも信者が現われそうな気がした。私もクリスチャンの一人なので、神父を中心に祈りを捧げている姿が目に見えかような感じがし、もしもあの時代に生きていたらどうなっただろうと思った。

若き城主志賀親次は、ドン・パウロの教名を持つ信者だったそうで、相当数の信者がいたということである。

午前中の見学を終えて、広瀬神社の前の食堂で昼食を

とる。店の中に男子の高校生の姿が多いので、その一人に理由を聞いてみたら、ここに下宿して、今昼食に帰っているということだった。

私は、ふと子供のころのことを思い出した。

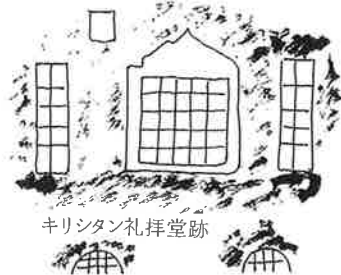
私の生まれは、ここからバスが通っている熊本県の小国である。

この地方の者は、小学校を卒業すると、熊本市内の中学校に進む。あのまま小国にいたら、私もやはりこの子供達と同じ下宿生活をしたんだなあと遠い昔が懐かしく思い出された。

外に出ると、珍しい建物が目に入った。郵便局である。看板を見るまではとても郵便局とは想像もつかない。これも周囲に合わせた気配りなのであろう。

見学も終りに近づいたので、帰途、店名は忘れたが竹田の名物三笠野と荒城の月を「ここが一番」という店で求めた。私の好きなものの一つである。

荒城の月のメロディの流れるトンネルを抜けて、円通



閣や愛染堂、そして十六羅漢の見学をする。

円通閣は藩の儒学者唐橋君山が、中国蘇州の寒山寺を模して建てられたものという。愛染堂は県の文化財で、目下修理中であつた。なんでも寛永十二年（一六三五）の建立で、藩主の中川久盛の造営になる単層方形造りのものだということである。四隅の軒下に天邪鬼と人面がついているのも面白い。

長い見学が終わって、かつての客人の宿泊所として使われたという茶房御客屋でお茶をいただく。

お別れは市役所の近くの川の中にある西南の役で刑死した方の墓を遠くから見て、竹田をあとにする。

ついではと思いついた沈墮の滝は、道路事情が悪く、これをあきらめ、夕刻、全員無事佐伯に帰り着く。

私にとっては二回目の旅だったが、今年もまた本当に楽しかった。史談会ならではの味があり、特に、あの七里田温泉の手作りの料理の味は、当分忘れられそうになり。これもまた史談会ならではの旅の味かもしれない。